



オクノフィリア, フィロバティズム概念を用いた パーソナリティ理解についての一考察

福井, 菜穂子
日潟, 淳子
吉田, 圭吾

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(1):23-31

(Issue Date)

2008-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000805>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000805>



オクノフィリア, フィロバティズム概念を用いた パーソナリティ理解についての一考察

A study on personality understanding based on the concepts of ocnophilia and philobatism

福井 菜穂子* 日 湯 淳 子** 吉 田 圭 吾***
Naoko FUKUI * Atsuko HIGATA ** Keigo YOSHIDA ***

要約：本研究では、オクノフィリアおよびフィロバティズム（Balint, 1959）という二つの対象関係概念を用いたパーソナリティ理解の視点を提示し、オクノフィリア・フィロバティズム・パーソナリティ尺度（OPP 尺度）を作成して、現代人の対人関係の諸相をとらえることを試みた。その結果、「自足－庇護」「変化－安定」「放任－掌握」「独立－密着」の4因子からなる十分な信頼性と妥当性のある OPP 尺度が作成された。OPP 尺度を用いて、一般大学生の対人関係の特徴を4因子の特性、および類型の2側面からとらえた結果、青年期におけるフィロバティズム、オクノフィリアの詳細な特性が明らかとなった。また、4因子によるクラスタ分析を行い、青年期の対人関係の特徴を類型的にとらえたところ、完全なフィロバティズム型は存在しないが、全体の約78%はいずれかの領域でフィロバティズム傾向を示していることが明らかとなった。しかし、それは単なる対人関係の希薄化というネガティブな側面ではなく、現代青年の傾向として、自立的で束縛されない対象関係の持ち方が多いということを意味する可能性が示唆された。Balint によるオクノフィリア、フィロバティズムという対象関係概念を用いることによって、その対人関係の諸特徴がより明瞭にとらえることが可能となった。

Key Words：オクノフィリア, フィロバティズム, 対象関係, 青年期

問題と目的

オクノフィリア、フィロバティズムとは、英国インディペンデント派の精神分析医 Balint, M. (1959) が提唱した対象関係概念で、それぞれ以下のような臨床像を記述するものとして提出されたものである。

オクノフィリア ocnophilia とは、人であれ物であれ、常に誰かや何かを身の回りに置いておかななくてはならない対象関係世界を表す概念である。例えば、本や CD など気に入ったものを収集し、自分の周辺に置いておく。気に入ったものは代わることもあるが、常に何かに入れ揚げ、なかなかそれを手放すことができない。人に対しても、必ずしも同一人物でなくてもよいが、自分が困ったときに助けてくれる人を常に求める。そのため、年齢、性別を問わず、たくさんの友人を持ち、また、その友人たちも進んで世話を焼いてあげたくなるような性質をもっている。つまり、常に対象を求め、対象と接することで安定感が得られる対象関係の持ち方と述べることができる。

一方、フィロバティズム philobatism とは、人であれ物であれ、

常に何ものからも身を遠ざけ、自由でいようとする対象関係世界を表す概念である。例えば、一つの場所に定住するよりも、引越しを繰り返し、新しい場所に移ることを好む。そのため、家具や生活用品など持ち物は必要最低限にとどめる傾向があり、物に執着しない。人に対しては、ほどよい距離を保ち、友達も多く、信頼される性質を持っていることもあるが、人から寄りかかられると煩わしく感じ、親密になることを避けて、うまくかわす。ひとりになれた時に、もっとも幸せを感じる。このように、何ものからも束縛されず、常に身軽でいようとする対象関係の持ち方である。

Balint (1959 中井他訳 1991) によると、まず、乳児にとって、母親との関係は、まだ母親が一個の対象として認識されていない、自己と対象の境界が未分化な「一次愛」として体験されるとされている。しかし、その調和的世界は、乳児が母親の対象性を発見することによって阻害される。そのとき、乳児がその現実に持ちこたえることができないならば、一次愛の調和を取り戻そうと退行する動きが現れる。その退行のあり方の一つがオクノフィリアであり、もう一つがフィロバティズムといわれる対象関係の持ち方である。こ

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科修了（現所属：羽曳野市健康増進課）

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科

*** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2008年4月1日 受付)
(2008年9月1日 受理)

れら二つの概念は、Balint (1959 中井他訳 1991) が「スリル」を鍵概念として導き出した対象関係世界である。オクノフィリア ocnophilia の語源は「しがみつく人」であり、スリルを恐怖し堅固不動な対象にしがみつかざるをえない心性を表している。つまり、空間は危険をはらんだ空虚であり、対象と片時も離れないよう密接することで一次愛の調和を取り戻そうと試みるものである。それに対して、フィロバティズム philobatism の語源は“つま先立ちで歩く人”であり、対象を手放して空間にさまよう、スリルを楽しむことのできる心性を表している。つまり、対象は危険な存在であり、むしろ対象の存在しない空間において一次愛の調和を取り戻そうと試みるものである。

Balint (1959 中井他訳 1991) が、オクノフィリアおよびフィロバティズムという概念を新造した目的としては、まず、原始的な対象関係をとらえる上で、口唇領域（取り入れ introjection, 投射 projection など）に注目したものは多いが、そのような口唇領域の概念ばかりに偏向していることが否めないことから、それ以外の領域をも含めた全身体感覚によってとらえることの必要性を訴えるという意図があったものと考えられる。また、Bowlby の「愛着」や Winnicott の「ホールディング」など、相互関係の大切さを扱った概念は多く見られるものの、一方の一方への依存が過度になりすぎるという否定的側面に注目したものは極めて少なく、相対する概念を打ち立てることによって、そのような偏向を指摘しようとしたことも、その理由のひとつである。確かに、フィロバティズムについては、類似した概念が見出しにくいといわれており（森, 1996）、対象を手放し空間に志向するという関係性の持ち方に焦点をあてたこと、および、寄りかからず自己の脚で立脚することの重要性を示した上で、非常に示唆深い概念であると考えられる。フィロバティズムにおいては、ひとり立ちするスキルを身につけていくという、より成熟した側面も含まれている。

この視点は現代人の対人関係をとらえる上で興味深いものである。例えば、近年、現代の対人関係の兆候の一つとして、青年期の対人関係の希薄化現象が指摘されている（千石, 1985, 1994; 栗原, 1989; 和田, 1990; 岡田, 1993）。これは、現代青年が自分自身や他者を傷つけることを恐れ、表面的で円滑な関係を求めるという傾向を指摘するものである。その一方で、こうした希薄化現象を、状況に応じて自己や付き合う相手を切り替える傾向として、とらえなおす試みもなされている（大谷, 2007）。対人関係の希薄化を、状況に応じて切り替えるという適応的側面ととらえなおすことは意義深いものと考えられるが、それに加え、他者に依存せず自己立脚できるという肯定的な側面も視野に入れる必要はあるであろう。また、このような現象は、広く子育てや教育の現場においても観察される現象でもある。例えば、子育てにおいては、母子のスキンシップを強調する一方で、母親が育児に押しつぶされないよう、適度に子どもから手を離すことの大切さも主張されるところである。したがって、愛着神話を今一度とらえなおす上でも、現代人の対象関係のあり方をオクノフィリア、フィロバティズムという二つのパーソナリティ概念によってとらえることは、パーソナリティ理解の上で極めて有用な知見を得るものであると考えられる。

このようなオクノフィリア、フィロバティズムをとらえる尺度としては、松岡（2000）のスリル体験尺度があげられる。松岡（2000）

は臨床場面において語られるスリル体験の重要性を指摘し、その主観的な意味世界を分析、解釈する枠組みを提示する目的で、フィロバティズム、オクノフィリア概念に基づいたスリル体験尺度を作成している。この尺度は、Balint (1959 中井他訳 1991) が「スリル」という体験において見られる現象をモデルとして両概念を導き出していることに依拠し、スリルに対するフィロバティズム的あるいはオクノフィリア的な態度を記述した全 18 の項目から構成されている。しかし、松岡（2000）の尺度は、Sensation-Seeking Scale（Zuckerman et al., 1964 など）や、その日本語版である刺激欲求尺度（寺崎・塩見・岸本・平岡, 1987; 古澤, 1989）など、他の理論からも項目が借用されていること、および全 18 項目では、人間生活のあらゆる側面を網羅するには十分とはいえず、オクノフィリア、フィロバティズムを測定する尺度としての妥当性には疑問の余地がある。また、松岡（2000）はオクノフィリアとフィロバティズムを対極するもの、つまり「オクノフィリアでないこと＝フィロバティズム」「フィロバティズムでないこと＝オクノフィリア」として処理し分析を行っているが、Balint (1959 中井他訳 1991) は、オクノフィリアとフィロバティズムに関して、“一方は他方の陰面（ネガ）ではない”ことを強調しており、これらの概念が真に対極に位置するものであるかどうかは、さらなる検討が必要だと考えられる。したがって、本研究において、Balint の述べた対象関係世界をより反映した、オクノフィリアおよびフィロバティズムの特性を論じるための枠組みとなる尺度を作成し、それらの概念に基づいた二側面からのパーソナリティの理解を試みる。

以上の見地から、本研究ではオクノフィリア・フィロバティズム・パーソナリティ尺度を作成し、オクノフィリアおよびフィロバティズムという二つの対象関係世界を論じるための枠組みとなる要素を抽出する。その後、作成した尺度を用いて特性論的視点と類型論的視点によって現代青年のパーソナリティの特徴をとらえる。Balint (1959 中井他訳 1991) は、オクノフィリアおよびフィロバティズムについて、“人間一般を眺めるときに両極としておのずと見えてくる二つのタイプがあるであろう”と前置きして論述を始めているが、その一方で“心（マインド）のいろいろな層において、それぞれ異なった組み合わせが見られる”ものであり、“極端な例はまず存在せず、たいていは、これら二つが種々の比で混ざった混合物である”とも述べている。つまり、オクノフィリア、フィロバティズムは各人が両者をあわせもっているという、特性論的な視点を基盤としているものの、ひとりの人間全体としてとらえる場合には、類型論的な観点も盛り込まれた概念であると考えられる。したがって、それらの要素の組み合わせにより、オクノフィリアおよびフィロバティズムのタイプ論的な検討も加えて行う。

なお、本研究においては、オクノフィリアおよびフィロバティズムを、それぞれ以下のように定義づける。オクノフィリアは、「空間は危険をはらんだ空虚であり、常に対象を求め、対象と膚接することで安定感を覚える。そこにおいては、対象は自己を世話し、かばい守ってくれるものと、とらえられている。しかし、その背後には、いつ対象から振り落とされるか分からないという恐怖心があり、対象にしがみつこうとする現象が前面に現れ出る。対象なくしては生きていけない。すがれる物なら、何でもいい。」という対象関係のあり方として定義する。フィロバティズムとは、「対象は自己を拘

束する厄介ものであるが、空間は自由でいられる友好的な広がりとして感じられる。そのため、煩わしい対象を手放し、常に対象と対象のすきまを生きようとする。その背後には、対象は自己を裏切るかもしれない危険物だとする恐怖心も存在するものの、それが前面には押し出されず、むしろ、そのような対象を適当にあしらい、弄ぼうとする現象が表に立つ。対象なんていない。何ものにも縛られず、飄々とさすらいたい。」という対象関係のあり方として定義する。

予備調査

目 的

オクノフィリア・フィロパティズム・パーソナリティ尺度（以下 OPP 尺度とする。）を作成するための項目収集を行う。

方 法

1) 調査対象者

兵庫県下の某大学の大学生・大学院生 24 名（男性 4 名、女性 20 名、平均年齢 22.3 才、19-28 才、SD = 1.9）。個別に質問紙を配布し、回答を依頼し後日回収した。

2) 調査時期

2007 年 7 月下旬

3) 質問紙内容

オクノフィリアおよびフィロパティズムについての定義を述べ、①公的な場面（学校、仕事など）、②私的な場面、③友人関係、④親子関係、⑤恋愛関係において、オクノフィリアおよびフィロパティズムの特性を持つ人物がそれぞれどのような態度や行動をとるかにについての自由記述。⑥フェイスシート（大学・大学院、学部・研究科、年生、年齢、性別）

結 果

オクノフィリアを記述した項目が 301 個、フィロパティズムを記述した項目が 281 個、合計 582 の項目が収集された。Balint 理論について詳しく説明し、よく理解した大学生・大学院生 5 名で KJ 法（川喜田、1967）の手法にならない、項目を整理し分類した。最終的にオクノフィリア項目 43 個、フィロパティズム項目 36 個、合計 79 の項目に集積された。その後、Balint 理論およびスリル体験尺度（松岡、2000）の項目内容と照らし合わせ、対物、対事象、対人間一般、対友人、対恋人、対親のあらゆる領域を網羅するよう配慮し、オクノフィリア項目 30 個、フィロパティズム項目 30 個、合計 60 項目を尺度作成のための項目として採用することとした。

本調査

目 的

OPP 尺度を作成し、オクノフィリア、フィロパティズムの二つの概念によって現代青年の対象関係の諸相をとらえる。

方 法

1) 調査対象者

兵庫県下の某大学の学部生・大学院生 287 名（男性 131 名、女性 148 名、不明 8 名、平均年齢 20.1 才、18-28 才、SD = 1.5）。学部生

については授業時間の一部を利用し、質問紙を配布し、その場で回収した。大学院生については、個別に質問紙を配布し、後日、回収した。調査対象者のうち 27 名（男性 5 名、女性 22 名、平均年齢 22.5 才、20-25 才、SD = 1.3）に再テスト法を実施した。

2) 調査時期

2007 年 11 月上旬。再テストは約 1 ヶ月後に実施。

3) 質問紙内容

(1) 新尺度の質問項目：①スリル体験尺度（松岡、2000）。5 件法（「全然あてはまらない」1 点－「ぴったりあてはまる」5 点）。②予備調査によって得られた 60 項目。5 件法（「全然あてはまらない」1 点－「非常によくあてはまる」5 点）。新尺度の質問項目はランダムに提示した。(2) 構成概念妥当性の検討のための尺度：①青年期用対象関係尺度（井梅・平井・青木・馬場、2006）。6 件法（「全くそう思わない」1 点－「とてもそう思う」6 点）②成人用愛着スタイル尺度（一般他者版）（中尾・加藤、2004）。7 件法（「全くあてはまらない」1 点－「非常によくあてはまる」7 点）。(3) フェイスシート（大学・大学院、学部・研究科、年生、年齢、性別）

4) 構成概念妥当性に使用する尺度について

①青年期用対象関係尺度（井梅ら、2006）

この尺度は、質問紙法を用いた対象関係評価尺度 BORI（Bell Object Relations Inventory：Bell, Billington & Becker, 1986）を原型とし、日本人にも適合した尺度項目になるよう、修正、改訂を繰り返して作成されたものである。青年期用対象関係尺度は、「親和不全」（6 項目）、「希薄な対人関係」（5 項目）、「自己中心的な他者操作」（5 項目）、「一体性の過剰希求」（6 項目）、「見捨てられ不安」（7 項目）の 5 因子で構成されている。この尺度とオクノフィリア、フィロパティズム概念との関連を考えると、以下のような仮説が予想される。青年期用対象関係尺度の「親和不全」は、対人的なやりとりにおいて自ら壁を作り、緊張して打ち解けられない傾向や、深くつきあうことを恐れる傾向を表している。また、「希薄な対人関係」は、実質的な中身を伴う対人交流ができず、相互理解やサポートの授受などが希薄な傾向を表している。そのため、フィロパティズム的な性格傾向と、これら「親和不全」および「希薄な対人関係」の因子に正の相関が見られることが予想される。それに対して、「一体性の過剰希求」は、他者との心理的距離が過度に近く、自分の欲求や行動が他者と 100% 共有されるはずだと思い、またそのような相手を求める傾向を表している。また、「見捨てられ不安」は、親しい人から拒絶されることや、取り残されることに対する恐れや、相手の反応に過敏な傾向を表している。そのため、オクノフィリア的な性格傾向と、これら「一体性の過剰希求」および「見捨てられ不安」の因子に正の相関が見られることが予想される。

②成人用愛着スタイル尺度：一般他者版（中尾・加藤、2004）

中尾・加藤（2004）が、Brennan et al.（1998）の成人用愛着スタイル尺度（the Experiences in Close Relationship inventory：ECR）を邦訳し、さらに ECR は愛着対象を恋人に限定した尺度であったため、それを一般他者版（the Experiences in Close Relationship inventory-the-generalized-other-version：ECR-GO）に改変したものである。「見捨てられ不安（Anxiety）」と「親密性の回避（Avoidance）」の 2 因子であり、それぞれ 18 項目の合計 36 項目から構成されている。本研究においては、Balint（1952 森他

訳 1999) がオクノフィリア的な世界と、Bowlby の「しがみつき」と「後追い」との類似性について叙述しているため、この尺度を構成概念妥当性の検討に用いることとした。オクノフィリア、フィロパティズム概念との関連を考えると、「見捨てられ不安 (Anxiety)」は、オクノフィリア的な性格傾向と正の相関を示し、「親密性の回避 (Avoidance)」はフィロパティズム的な性格傾向と正の相関を示すことが予想される。

結果¹⁾

1) OPP 尺度の作成

(1) 項目分析

本研究において新たに考案した 60 項目と、松岡 (2000) のスリル体験尺度 18 項目を合わせた合計 78 項目において、天井効果およびフロア効果が見られた 7 項目を削除した。その後、因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を重ね、因子負荷量が .35 未満のもの、または負荷量が分散したものを削除し、スクリープロットおよび因子寄与率から最終的に解釈可能と思われる 4 因子 33 項目を抽出した。Table 1 に因子分析結果および因子寄与、因子間相関を示す。なお、オクノフィリア項目およびフィロパティズム項目は、それらの概念の一次元性を仮定せずに作成したが、因子分析の結果、因子負荷量はフィロパティズム項目では正の値を示し、オクノフィリア項目では負の値を示した。したがって、一次元の尺度として OPP 尺度を作成することとする。

第一因子は「人に相談せず、自己解決してしまう方だ。」「何かと人に相談することが多い。(逆転項目)」などの 9 項目で、悩みや問題を抱えているとき、それを自己の力で解決しようとするか、他者を頼みとするかととらえられ、「自足一庇護」とした。第二因子は「スリルを求めるあまり、余計なリスクを引き受けてしまう。」「たとえ安全だとわかっていても、スカイダイビングはやりたくない。(逆転項目)」 「衝動的な恋愛が多い。」などの 12 項目で、変化やスリルある体験を求めるか、安定感を求めるかととらえられるため、「変化一安定」とした。第三因子は「恋人がいま何をしているのか、よく気になる。(逆転項目)」 「友人にそっけなくされると、とても不安になる。(逆転項目)」などの 6 項目であった。この因子は、オクノフィリア項目のみから構成され、フィロパティズム項目は分類されなかったが、他者からの視線や評価に縛られず、また自己も他者を縛らない性質か、それとも、他者からの視線や評価を気にし、自らも他者の状態を把握しておこうとする性質かととらえられるため、「放任一掌握」とした。第四因子は「誰かと一緒にいるよりも、一人の方が好きだ。」「趣味や都合に合わせて、たくさんの友人がいる。(逆転項目)」などの 6 項目で、他者から離れて単独でいることを好むか、他者と共にいることを好むかととらえられるため、「独立一密着」とした。これらは自足、変化、放任、独立がフィロパティズム的な性質を、庇護、安定、掌握、密着がオクノフィリア的な性質を表しており、得点が高くなるにしたがってフィロパティズム的な、低くなるにしたがってオクノフィリア的な性格傾向を示す尺度が作成された。

因子寄与においては、第一因子が 3.81、第二因子が 3.08、第三因

Table1 OPP 尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子負荷量) (N=287)

	I 自足-庇護	II 変化-安定	III 放任-掌握	IV 独立-密着
新: 人に相談せず、自己解決してしまう方だ。	.72	-.04	-.10	-.15
ス: 他人に頼るよりも、自分で解決してしまう方だ。	.71	-.04	-.13	-.07
ス: 何かと人に相談することが多い。(一)	-.67	-.04	.01	.14
新: 悩みがあったら、すぐ友人に頼る。(一)	-.67	-.03	-.13	.00
新: 些細なことも、親に相談してしまう。(一)	-.61	-.04	-.05	-.14
新: 親離れできない。(一)	-.48	.01	-.07	-.25
新: 友人に甘えるのは好きではない。	.46	-.04	.02	-.13
新: 親に頼りたくない。	.42	-.04	-.05	-.02
新: 気がつけば周囲がフォローしてくれている。(一)	-.40	-.09	.00	-.03
ス: スリルを求めるあまり、余計なリスクを引き受けてしまう。	.17	.61	-.01	.03
新: 放浪癖があるかも知れない。	.02	.58	.05	.26
ス: たとえ安全だとわかっていても、スカイダイビングはやりたくない。(一)	.14	-.55	.07	.08
ス: スリルを味わうためにジェットコースターのような乗り物に乗るのが好きだ。	-.08	.53	.00	-.03
ス: 不安定でも変化に富んだ生活を送りたい。	.02	.51	-.04	-.14
ス: スピード感のある乗り物は、爽快というよりは怖い。(一)	.19	-.49	.04	.05
ス: 私の生活は堅実で安定志向である。(一)	-.10	-.49	.02	.01
ス: 目新しくて、変化に富んだいろいろなことをしてみたい。	-.11	.49	.10	-.22
ス: スキューバダイビングをしたいと思う。	-.09	.42	.02	-.19
ス: ひとつの所へ腰を落着けた仕事に就きたい。(一)	-.06	-.38	.00	-.02
新: 恋愛は、一人の相手とするものだと必ずしも思っていない。	.13	.36	-.16	.20
新: 衝動的な恋愛が多い。	.23	.35	.15	.23
新: 恋人がいま何をしているのか、よく気になる。(一)	.07	.01	-.82	.06
新: 常に恋人と一緒にいたいと思う。(一)	.10	-.07	-.70	.08
新: 恋人に、ちょっとしたことで、すぐ焼きもちをやいてしまう。(一)	-.09	-.04	-.64	.00
新: 自分が辛いときも嬉しいときも、それを恋人に分かち合っ	-.10	.07	-.50	.26
てほしい。(一)				
新: 何をしてもお手本を求める。(一)	-.01	.11	-.50	-.32
新: 友人にそっけなくされると、とても不安になる。(一)	.01	.05	-.48	-.03
ス: 誰かと一緒にいるよりも、一人の方が好きだ。	-.17	.07	-.03	.63
新: 友人はいるが、特別に機会をもうけて遊ぼうとはしない	-.05	-.03	.03	.61
方だ。				
新: 一人であるよりも、友人という時間の方が好きである。	.07	.06	.02	-.56
(一)				
新: 一人の時間に友人から連絡があるとイライラする。	.10	.09	.00	.50
新: 同窓会などにあまり参加しない方だ。	.06	-.06	.01	.44
新: 趣味や都合に合わせて、たくさんの友人がいる。(一)	.06	.08	.04	-.41
因子寄与	3.81	3.08	3.01	2.91
因子間相関	I	II	III	IV
I 自足-庇護	1.00	-.05	.33	-.25
II 変化-安定	-.05	1.00	.11	-.22
III 放任-掌握	.33	.11	1.00	-.27
IV 独立-密着	-.25	-.22	-.27	1.00

* 因子負荷量が .35 以上の項目を選択した。

* 項目の前の「ス」は、スリル体験尺度 (松岡, 2000) からの項目を示し、「新」は本研究で新たに考案された項目を示す。

* 項目のあとの (一) は逆転項目であることを示す。

* 回転後の累積寄与率は、33.50% である。

Table 2 下位尺度間の相関係数 (N=287)

	I 自足-庇護	II 変化-安定	III 放任-掌握	IV 独立-密着
I 自足-庇護	—			
II 変化-安定	.03	—		
III 放任-掌握	.28 **	-.07	—	
IV 独立-密着	.23 **	-.17 **	.22 **	—

**p < .01

子が 3.01、第四因子が 2.91 であり、累積寄与率は 33.50% と比較的低い値を示した。下位尺度間相関は、第四因子は他の 3 つの因子のすべてと有意な相関が見られ、第一因子と第三因子の間にも有意な相関が見出された。第二因子については、第一因子および第三因子との間に相関は示されなかった (Table 2)。

(2) 信頼性および構成概念妥当性の検討

① 信頼性の検討

A. 内的整合性

各因子において信頼性係数 α を算出した結果、第一因子は $\alpha = .82$ 、第二因子は $\alpha = .77$ 、第三因子は $\alpha = .78$ 、第四因子は $\alpha = .71$ であり、いずれも内的整合性があることが示された。

B. 再テスト信頼性

全回答者 287 名のうち 27 名 (男性 5 名、女性 22 名) を対象として、1 ヶ月後、同一内容の質問紙を実施した結果、一回目と二回目における各下位尺度得点の相関係数は $r = .88 \sim .93$ (いずれも $p < .01$) の値をとり、再テスト信頼性があることが示された (Table 3)。

Table 3 一回目実施と二回目実施における下位尺度得点の相関係数 (N=27)

	I 自足-庇護	II 変化-安定	III 放任-掌握	IV 独立-密着
r	.90 **	.93 **	.88 **	.88 **

**p < .01

1) 結果の分析には、SPSS for Windows 12.0J を用いた。

②構成概念妥当性の検討

A. 青年期用対象関係尺度との関連

OPP 尺度と青年期用対象関係尺度との間の相関係数を Table 4 に示す。「自足－庇護」は、「親和不全」「希薄な対人関係」と正の相関を示し、「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」とは負の相関を示した。「変化－安定」は、「自己中心的な他者操作」とのみ正の相関が認められた。「放任－掌握」は、「希薄な対人関係」と弱い正の相関を示し、「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」との間には負の相関が見出された。とりわけ「一体性の過剰希求」および「見捨てられ不安」との間の相関は強い相関であった。「独立－密着」は、「親和不全」「希薄な対人関係」と強い正の相関を示し、「自己中心的な他者操作」との間にも弱い正の相関が見受けられた。

Table 4 青年期用対象関係尺度とOPP尺度との相関係数 (N=287)

	親和不全	希薄な対人関係	自己中心的な他者操作	一体性の過剰希求	見捨てられ不安
I 自足-庇護	.16 **	.26 **	.08	-.26 **	-.18 **
II 変化-安定	.07	-.03	.23 **	.01	-.05
III 放任-掌握	-.05	.14 *	-.17 **	-.53 **	-.51 **
IV 独立-密着	.55 **	.57 **	.13 *	-.06	.11

*p<.05, **p<.01

B. 成人用愛着スタイル尺度：一般他者版との関連

OPP 尺度と成人用愛着スタイル尺度との間の相関係数を Table 5 に示す。「自足－庇護」は、「見捨てられ不安 Anxiety」と負の相関を示し、「親密性の回避 Avoidance」との間には強い正の相関が示された。「変化－安定」は、成人用愛着スタイル尺度のどちらの因子とも有意な相関は見られなかった。「放任－掌握」は、「見捨てられ不安 Anxiety」と強い負の相関を示し、「親密性の回避 Avoidance」との間にも正の相関が見出された。「独立－密着」は、「親密性の回避 Avoidance」とのみ強い正の相関が認められた。

Table 5 成人用愛着スタイル尺度とOPP尺度との相関係数 (N=287)

	見捨てられ不安 Anxiety	親密性の回避 Avoidance
I 自足-庇護	-.23 **	.48 **
II 変化-安定	.02	-.03
III 放任-掌握	-.57 **	.24 **
IV 独立-密着	.07	.56 **

**p<.01

2) 現代青年のオクノフィリア、フィロバティズム特性の検討

(1) 基礎統計による検討

男性 131 名、女性 148 名、全回答者 287 名（不明 8 名も含む）について、下位尺度得点の平均値および SD を算出した（Table 6）。性差を検討するため、各因子において男女間で t 検定を行った結果、「自足－庇護」「変化－安定」において、男性が女性よりも得点が有意に高いことが示された。

Table 6 OPP 尺度における各下位尺度得点の平均値および SD、男女間の t 検定結果

	n	全回答者 287	男性 131	女性 148	t 値
I 自足-庇護		3.22(0.71)	3.45(0.60)	2.99(0.74)	5.81 ***
II 変化-安定		2.75(0.67)	2.87(0.66)	2.62(0.66)	3.08 **
III 放任-掌握		2.75(0.78)	2.81(0.76)	2.71(0.78)	ns.
IV 独立-密着		2.71(0.71)	2.76(0.72)	2.66(0.70)	ns.

・下位尺度得点は 1 点～5 点の値をとる。() 内は SD を示す。

p<.01, *p<.001

(2) クラスタ分析による類型論的検討

全回答者 287 名について、OPP 尺度の下位尺度得点を標準化し、

クラスタ分析 (K-means 法) を行った。「自足－庇護」「変化－安定」「放任－掌握」「独立－密着」の 4 つの領域における対象関係の態度から、解釈可能であった 4 群を採用した (Figure 1)。

1 群, 2 群, 3 群は 4 因子において得点の高低にばらつきが見られたが, 4 群のみが 4 因子すべてにおいて低得点を示した。そのため, 1 群, 2 群, 3 群はオクノフィリアとフィロバティズムの複合型ととらえられ, 4 群はオクノフィリアととらえることができる。松岡 (2000) における因子名を参考に, 4 つのクラスタをそれぞれ以下のように解釈した。

1 群は変化と掌握を特徴としており, スリルある体験や刺激的な体験を好むフィロバティズム的な側面を持つ一方で, 対象を手放さないようにしっかりしがみつづけているオクノフィリア的な側面も備えている群と考えられたため, 「オクノフィリア・フィロバティズム混合型」とした (67 名: 男性 34 名, 女性 30 名, 不明 3 名)。2 群は第一因子, 第二因子, 第三因子において得点が高く, 第四因子のみが低得点となった群で, 一般的にフィロバティズム傾向の強い群と考えられた。とりわけ, 自足と放任, 密着を主な特徴としており, 対象とは共にありたいが, 対象を縛らず, 自らも対象に縛られたくない, 自分の問題は自分で解決しようとする群ととらえられ, 「共存自立型フィロバティズム」とした (68 名: 男性 39 名, 女性 26 名, 不明 3 名)。3 群は第一因子, 第三因子, 第四因子において高得点を示し, 第二因子のみが低得点となった群で, 全般を通してフィロバティズム傾向の強い群と考えられた。とりわけ, 独立と安定を主な特徴としており, 一人単独でいる状態で安定感を求める群ととらえられ, 「単独安住型フィロバティズム」とした (88 名: 男性 45 名, 女性 41 名, 不明 2 名)。4 群は 4 因子すべてにおいて低得点を示した群であり, 「オクノフィリア」とした。この群は庇護と密着を特徴としており, 対象と密接し, 対象にかばい守ってもらうことを求める群と考えられた (64 名: 男性 13 名, 女性 51 名)。各クラスタにおける男女の人数において χ^2 検定を行ったところ, 有意な偏りが見られた ($\chi^2(3) = 24.65, p < .001$)。残差分析を行ったところ, 「共存自立型フィロバティズム」で男性が女性より有意に多く ($p < .05$), 「オクノフィリア」で女性が男性よりも有意に多かった ($p < .01$)。

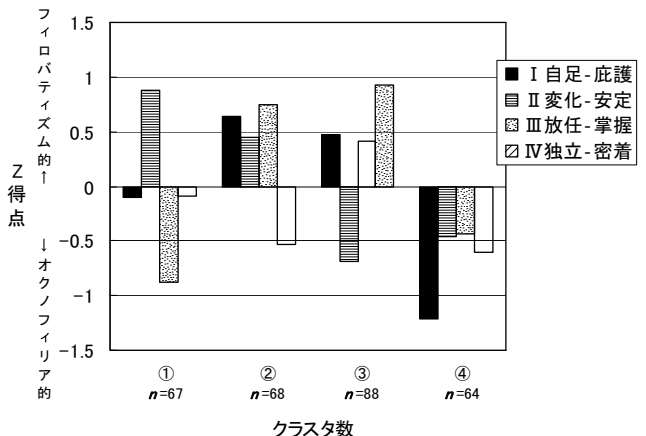


Figure1 OPP 尺度のクラスタ分析によるグループ分け

考 察

1) OPP 尺度の信頼性と妥当性

本研究において作成された OPP 尺度は、「自足－庇護」「変化－安定」「放任－掌握」「独立－密着」の 4 因子構造をなしており、項目数は「自足－庇護」9 項目、「変化－安定」12 項目、「放任－掌握」6 項目、「独立－密着」6 項目の合計 33 項目であった。

本尺度は、スリル体験尺度(松岡, 2000)に比較して、項目数が多く、生活場面・対人場面のあらゆる領域を網羅するよう作成されている。スリル体験尺度(松岡, 2000)においては、「具体的行動」「生活姿勢」「対人関係」の 3 因子構造であり、そのような実際的な生活場面における 3 つの領域において、フィロパティズム的な、あるいはオクノフィリア的な性格傾向を測定する尺度となっている。一方、本研究で作成された尺度は、「自足－庇護」「変化－安定」「放任－掌握」「独立－密着」の因子からなっており、松岡(2000)の尺度よりも、より抽象性を帯び、Balint 理論における内的世界の対象との接し方、空間との関わり方を測定する尺度といえるであろう。

また、信頼性においては、 α 係数はいずれの因子においても $\alpha = .71 \sim .82$ の値を示しており、内的整合性のあることが示された。さらに、再テスト信頼性においても、いずれの因子においても、 $r = .88 \sim .93$ (いずれも $p < .01$) の高い相関が示され、本尺度は十分な信頼性、安定性を持つ尺度と考えられる。

構成概念妥当性については、青年期用対象関係尺度(井梅ら, 2006)および成人用愛着スタイル尺度(中尾・加藤, 2004)を妥当性検討の尺度として用いた。青年期用対象関係尺度においては、「親和不全」および「希薄な対人関係」とフィロパティズム的な性格傾向に、「一体性の過剰希求」および「見捨てられ不安」とオクノフィリア的な性格傾向に、それぞれ関連が見られるとの仮説を立てた。本研究においては、「自足」「独立」「放任」というフィロパティズム的な性格傾向と、「親和不全」や「希薄な対人関係」との間に正の相関を示した。また、「庇護」「掌握」というオクノフィリア的な性格傾向と、「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」との間に相関が見られた。したがって、これらの点において仮説は支持された。一方、青年期用対象関係尺度の「自己中心的な他者操作」という因子は、対象を自分の都合に合わせて自在に操るというフィロパティズム的な性質が強い因子ではないかと考えられるが、今回の結果においては、「変化－安定」と有意な正の相関を示し、「独立－密着」との間にも正の相関が見受けられたものの、「放任－掌握」との間には負の相関が見出された。このように相関に正負の反転が見られたことは、オクノフィリア、フィロパティズムという特性が、一概にオクノフィリアが対象を求め、フィロパティズムが対象を回避するというとらえ方では集約しきれないことを示唆するものであり、後述の特性の検討において、再度、考察することとする。

成人用愛着スタイル尺度においては、「見捨てられ不安(Anxiety)」とオクノフィリア的な性格傾向との間に正の相関が、「親密性の回避(Avoidance)」とフィロパティズム的な性格傾向との間に正の相関が示されるとの仮説を立てた。本研究において見出された結果は、「自足－庇護」が「見捨てられ不安(Anxiety)」との間に負の相関を示し、「放任－掌握」も「見捨てられ不安(Anxiety)」との間に強い負の相関を示した。このことは、「庇護」および「掌握」というオクノフィリア的な性格傾向

が、「見捨てられ不安(Anxiety)」と関連していることを意味している。一方、「自足－庇護」および「独立－密着」は「親密性の回避(Avoidance)」と強い正の相関を示し、「放任－掌握」も「親密性の回避(Avoidance)」と有意な正の相関を示している。このことは、「自足」「独立」「放任」というフィロパティズム的な性格傾向が「親密性の回避(Avoidance)」と関連していることを意味している。これらのことから、仮説は支持されたと考えられる。

信頼性の検討、および構成概念妥当性の結果から、本研究において、オクノフィリア、フィロパティズムの特性を多面的にとらえる妥当な尺度が作成されたと考えられる。しかしながら、累積寄与率は低い数値を示しており、この点に関しては、再考の余地が残された。

2) OPP 尺度の 4 因子の特性の検討

OPP 尺度において、「自足－庇護」「変化－安定」「放任－掌握」「独立－密着」の 4 つの因子が見出され、オクノフィリア、フィロパティズムという対象関係世界を論じる上で、それら 4 つの要素が想定されることが示唆された。これら 4 つの各因子において、青年期用対象関係尺度および成人用愛着スタイル尺度との相関から、それらがどのような特性であるのかを考察する。

①「自足－庇護」について

この因子は、問題が起きたときに自己解決するか、人に頼るかを中心とする質問項目で構成されている。「自足－庇護」においては、青年期用対象関係尺度の「親和不全」「希薄な対人関係」と正の相関が示され、「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」との間には負の相関が示された。また、成人用愛着スタイル尺度との間には、「親密性の回避(Avoidance)」との間に強い正の相関が認められ、「見捨てられ不安(Anxiety)」との間には負の相関が得られた。

これらのことから、「自足－庇護」の因子におけるフィロパティズム(すなわち「自足」)は、他者と親密になることを避け、それゆえに対人関係も希薄なものとなると考えられるが、「見捨てられ不安」と負の相関を示していることから、その背後には、他者から見捨てられる不安や恐怖心は存在していないものと考えられる。したがって、見捨てられ不安を抱かずに、他者から離れ、自己解決していくことができる特性であると解釈できる。それに対して、この因子におけるオクノフィリア(すなわち「庇護」)は、他者から見捨てられるのではないかと不安を抱き、他者との一体性を過剰に求めるような特徴がうかがわれ、それゆえに、他者と打ち解け、親密な関係を求める特性と考えられる。したがって、他者の存在を必要としているが、その背後には、見捨てられ不安があるものと解釈できる。これらのことから「自足－庇護」の因子は、対象から離れていられることの健康的な側面と、相互関係における病理的な側面を意味するものであると考えられ、したがって、Balint が定義するオクノフィリア、フィロパティズムの特徴的な特性を示していることが推測される。

②「変化－安定」について

「変化－安定」に含まれる項目は、「スリルを求めるあまり、余計なリスクを引き受けてしまう。」「たとえ安全だとわかっている、スカイダイビングはやりたくない。(逆転項目)」「衝動的な恋愛が多い。」などであるが、そのような体感としての「変化－安定」、実際的な生活態度、および対人態度としての「変化－安定」という概

念が盛り込まれている点が、口唇領域という一部分ではなく、全身感覚としてとらえることの重要性を指摘した Balint の新たな知見であると考えられる。「変化－安定」においては、青年期用対象関係尺度の「自己中心的他者操作」とのみ有意な正の相関が示された。このことは、「変化－安定」におけるフィロバティズム（すなわち「変化」）は自己の都合にあわせて他者を操作しようとする傾向があることを示し、反対に、この因子におけるオクノフィリア（すなわち「安定」）はそのような他者操作をする傾向がないことを示しているといえる。フィロバティズムとは、停滞を嫌い、次々と変転することを好む特性であり、自らのスキルを駆使して対象を自由自在に操ろうとする性質があるものとされているため（Balint 1959 中井他訳 1991）、その点において、自己中心的に他者を操作し、利用しようとする「自己中心的他者操作」と正の相関が見られたのではないかと考えられる。オクリフィリア、フィロバティズムの概念は「スリル」を鍵概念として導き出されたものであり、「変化－安定」という因子は、Balint 理論の、他の精神分析理論と比較しての特異性をもっともよく示しているものであるとも考えられる。

③「放任－掌握」について

「放任－掌握」は、他者からの視線を気にし、他人の態度が気になることを示唆する質問項目からなる。青年期用対象関係尺度の「自己中心的他者操作」との間に弱い負の相関が示され、「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」との間には強い負の相関が見出された。一方、「希薄な対人関係」との間には弱い正の相関が見受けられた。また、成人用愛着スタイル尺度の「見捨てられ不安（Anxiety）」との間にも強い負の相関が認められ、「親密性の回避（Avoidance）」との間には有意な正の相関が示された。

この「放任－掌握」という因子におけるオクノフィリア（すなわち「掌握」）は、他者に見捨てられるのではと大きな不安を抱き、他者との一体性を過剰に求め、他者を意のままに操作しようとする特徴がうかがわれることを示している。それに対して、この因子におけるフィロバティズム（すなわち「放任」）は、他者からの見捨てられに対する不安や、一過性の過剰な希求を抱いておらず、他者と距離を置こうとする傾向が示唆された。この因子において、青年期用対象関係尺度の5因子のうち4因子と、このような関連が認められたということは、「掌握」という特性の有無が、「健康的－病的」な特性を示唆する可能性もある。本研究においては、対象者は一般大学生であったため、この点についてはさらなる検討が必要であるが、この「放任－掌握」という要素は臨床上也有効な概念となるものではないかと考えられる。

④「独立－密着」について

「独立－密着」に含まれる項目は「誰かと一緒にいるよりも、一人の方が好きだ。」や「一人であるよりも、友人という時間の方が好きである。（逆転項目）」などであり、他者と関わらず単独でいようとするか、他者と共にいることを好むかを表す因子である。「独立－密着」においては、青年期用対象関係尺度の「親和不全」「希薄な対人関係」と強い正の相関が示され、「自己中心的他者操作」との間にも弱い負の相関が認められた。また、成人用愛着スタイル尺度の「親密性の回避（Avoidance）」との間にも強い正の相関が見出されている。

この「独立－密着」の因子におけるフィロバティズム（すなわち「独立」）は、他者と親密につきあうことを回避し、対人関係も希薄なものとなる。また、自己の意のままに他者を操作しようとする傾向もうかがわれる特性と考えられる。それに対して、この因子におけるオクノフィリア（すなわち「密着」）は、他者と相互関係を保ち、親密な関係性の中にあることを心地よいと感じる特性であると考えられる。しかし、これらは「見捨てられ不安」や「一体性の過剰希求」とは関連がなく、そのような思いから生じるものではないことが示唆された。したがって、不安や恐怖心とは関連なく、端的に個でいることを好むか、対象と接していることを好むかであると考えられ、より簡素で原始的な対象関係のあり方を示す因子ではないかと考えられる。

3) 現代青年のオクノフィリア、フィロバティズム特性の傾向

(1) OPP 尺度における男女別の違いの検討

本研究において作成された OPP 尺度の各因子において、男女別の下位尺度得点の平均値を比較したところ、「自足－庇護」「変化－安定」において男性のほうが女性よりも有意に得点が高いことが示された。このことは、男性のほうが女性よりも有意に「自足」「変化」を求める性格傾向を示し、女性のほうが男性よりも有意に「庇護」「安定」を求める性格傾向を示すことを表している。松岡（2000）においても、これと同様の傾向が示されており、松岡（2000）はその要因として、文化的、社会的な性別役割観による影響をあげている。しかし、その一方で、「放任－掌握」「独立－密着」の因子においては、男女間で有意差は見出されていない。これらの結果は、Balint（1959 中井他訳 1991）が、フィロバティズム、攻撃性、能動性と男性性とは密接な関係にあり、オクノフィリア、被虐性、受動性と女性性とは密接な関係にあるということは、表面的には支持される現象がたくさん存在するであろうが、深い水準まで追求すれば、それらが等価のものであるとは言えないであろうとしていることと一致するものと考えられる。Balint（1959 中井他訳 1991）は、男女を問わず普遍的に見られる対象関係のあり方として、オクノフィリア、フィロバティズムを位置づけている。したがって、今回、見出された結果においては、「自足－庇護」「変化－安定」がより表層的な、「放任－掌握」「独立－密着」がより深層的な対象関係世界を表すものとも考えられる。

(2) クラスタ分析による類型論的検討

本研究においては、Balint（1959 中井他訳 1991）が、オクノフィリアおよびフィロバティズムについて“心（マインド）のいろいろな層において、それぞれ異なった組み合わせが見られる”“極端な例はまず存在せず、たいていは、これら二つが種々の比で混ざった混合物である”としていることから、OPP 尺度の4因子における下位尺度得点のパターンによって、現代青年の対象関係の諸相をとらえることを試みた。

クラスタ分析の結果、4群が解釈可能であると判断され、クラスタ①「オクノフィリア・フィロバティズム混合型」（n = 67）、クラスタ②「共存自立型フィロバティズム」（n = 68）、クラスタ③「単独安住型フィロバティズム」（n = 88）、クラスタ④「オクノフィリア」（n = 64）と解釈された。クラスタ④は4因子すべてにおいて得点が低く、「オクノフィリア」と解釈されたが、すべての因子において得点が高くなるようなフィロバティズムは見出されなかった。こ

のことは、現代青年の対象関係のあり方において、対象との関わりを完全に遮断するというようなフィロパティズムは存在しないということの意味するものと思われる。あるいは、現代青年に限らず、普遍的に人間すべてにおいて、フィロパティズムのような対象関係のあり方では、生きていくことができないということも考えられ、それゆえ、これまでフィロパティズムという対象関係のあり方が発見されず、注目されてこなかった理由の一つではないかとも考えられる。

しかし、すべての因子においてフィロパティズム的ではなくとも、4因子のうち、いずれかの因子においてフィロパティズム的な傾向を特徴とするクラスタが3群も見出されたということは、現代青年の対象関係態度において、フィロパティズムの要素が含まれることを示していると考えられる。そのように考えるならば、本研究の対象者のうち約78% (287名中、223名) が何らかのかたちでフィロパティズム的なパーソナリティだといえる。そのような自立的で束縛されない対象関係の持ち方が現代青年の傾向として見られ、このような傾向は、依存せず自己立脚することが求められる社会の風潮なども影響を与えていることも考えられる。

クラスタごとにそれらの特徴をとらえると、クラスタ①「オクノフィリア・フィロパティズム混合型」は、変化と掌握を特徴としている。自らは変化を求めるが、他者については、他者の行動のみならず、すべてを知っておきたいというアンビバレンスなパーソナリティであることが推測される。「掌握」は前述の「放任－掌握」の特性についての検討から、病理性と関連の深い要素ではないかと考えられる。一つの仮説として、クラスタ①では、「掌握」というオクノフィリア的な対象関係の縛りから、解放を求めるようなかたちで、反動形成的に「変化」を追求するのではないかとすることも予測される。これに類似した結果として、松岡 (2000) においても、男性において対人関係における独立と依存のパターンが、具体的なスリル体験への志向性に対して反転する傾向が示唆されているが、体感的スリルと病理的側面との関連については、さらなる実証的研究の積み重ねが必要と考えられる。

クラスタ②「共存自立型フィロパティズム」は自足と放任、そして密着を特徴としている。このクラスタは、友人や仲間と過ごす時間を好むが、他者の態度を気にして、その態度から不安を感じることもなく、自分のことは自己解決しようとする群であり、前述の「自足－庇護」「放任－掌握」「独立－密着」の特性の特徴から推察すると、精神的健康度が高く、より成熟的なパーソナリティではないかと考えられる。

クラスタ③「単独安住型フィロパティズム」は安定と独立を特徴としている。人に頼ることを嫌い、一人で安住することを好む行動から、対人的な態度におけるフィロパティズム的なパーソナリティではないかと考えられる。このクラスタの人数が一番多かった。このことは、他者と親密になることを避け、表面的で円滑な対人関係を志向するという現代青年の特徴 (千石, 1985, 1994; 栗原, 1989; 和田, 1990; 岡田, 1993) を示すものといえる。従来、このような対人関係の希薄化現象は、ストレスや問題行動の原因となるものとして指摘されてきたが、このクラスタの特徴からは、他者に対して恐怖心や不安を抱くという病理的な側面は見出されなかった。したがって、このクラスタは、他者に寄りかからず自己立脚し

て生きていくスキルを身に付けるという意味で、現代青年の対人関係における、より健康的で適応的な側面を明らかにしたものではないかと考えられる。

クラスタ④はすべての因子で負の得点を示したことから、完全なオクノフィリアであると考えられる。Balint (1959 中井他訳 1991) は、極端な例はほとんど存在せず、存在したとすれば病的な人物であろうと述べているが、本研究においては、一般大学生の中にも、完全なオクノフィリアに比較的近いパーソナリティが見出された。そのため、今後、臨床場面において観察されるようなフィロパティズム、オクノフィリアの現象についても検討し、これらのパーソナリティ概念についての理解を深めていくことが必要と考えられる。

また、これら4つのクラスタの男女差について χ^2 検定を行った結果、「共存自立型フィロパティズム」で男性が女性より多い傾向が示され、「オクノフィリア」では女性が男性よりも有意に多かった。しかし、「オクノフィリア・フィロパティズム混合型」および「単独安住型フィロパティズム」においては、男女での差は見出されなかった。これらは、前述のように、フィロパティズムと男性性、オクノフィリアと女性性に関連がある傾向を示しているものの、それらが男女を問わず普遍的に見られる対象関係のあり方として定義できること (Balint 1959 中井他訳 1991) を実証するものであると考えられる。

4) 本研究の意義と今後の課題

本研究において、現代人のパーソナリティの特徴をとらえる上で、オクノフィリア、フィロパティズムの対象関係概念が有効であることが示された。とりわけ、現代においては、青年の対人関係の希薄化が懸念されているが、それを単なる希薄化としてとらえるのではなく、これら二つの対象関係概念を用いることによって、その対人関係の諸特徴がより明瞭に示されたといえる。しかし、本研究においては、精神的健康度を測定する尺度を実施していなかったため、青年期の対人関係のあり方の適応性をとらえることができなかった。今後、適応性の面から検討していく必要がある。

文 献

- Balint, M. (1952). Primary love and psycho-analytic technique. London: Tavistock Publications.
(バリント, M. 森茂起・栢矢和子・中井久夫 (訳) (1999). 一次愛と精神分析技法 みすず書房)
- Balint, M. (1959). Thrills and Regressions. Madison: International Universities Press.
(バリント, M. 中井久夫・滝野功・森茂起 (訳) (1991). スリルと退行 岩崎学術出版社)
- Bell, M. D., Billington, R., & Becker, B. (1986). A scale for the assessment of object relations: Reliability, validity, and factorial invariance. *Journal of Clinical Psychology*, **42**, 733-741.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Selfreport measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. pp.46-76.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 (2006). 日本におけ

- る青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, **14**, 181-193.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 - 創造性開発のために 中公新書
- 古澤照幸 (1989). 刺激欲求尺度・抽象表現項目版 (Sensation Seeking Scale-Abstract Expression) 作成の試み 心理学研究, **60**, 180-184.
- 栗原 彬 (1989). やさしさの存在証明 — 制度と若者のインターフェイス 新曜社
- 松岡 努 (2000). 「スリル」に関する心理的体験構造の基礎研究 — 質問紙法を用いたアプローチの検討 心理臨床学研究, **17**, 606-611.
- 森 茂起 (1996). 「甘え」と一次愛 — 土居健郎と Balint, M. による心の原初領域の把握 心理臨床学研究, **14**, 257-268.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162-170.
- 大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替 — 心理的ストレス反応との関連にも注目して 教育心理学研究, **55**, 480-490.
- 千石 保 (1985). 現代若者論 — ポストモラトリウムへの模索 弘文堂
- 千石 保 (1994). マサツ回避の世代 — 若者のホンネと主張 PHP 研究所
- 寺崎正治・塩見邦雄・岸本陽一・平岡清志 (1987). 日本語版 Sensation-Seeking Scale の作成 心理学研究, **58**, 42-48.
- 和田 実 (1990). 青年の対人関係の変容 久世敏雄 (編) 変貌する社会と青年の心理 福村出版, pp.83-102.
- Zuckerman, M., Kolin, E. A., Price, L., & Zoob, I. (1964). Development of a sensation-seeking scale. *Journal of Consulting Psychology*, **28**, 477-482.

